

# 生徒指導部通信

令和4年度特別号  
令和4年10月5日  
校長 村木 宗徳

先日、旭山動物園園長、坂東<sup>ばんとう</sup>元<sup>げん</sup>氏の講演を聞く機会がありましたので、その一部を紹介します。

皆さんもご存知のように、坂東園長は、透明なアクリルの筒の中を泳ぐアザラシや、地上から17メートルの綱を渡るオランウータン、頭の上を泳ぐペンギンなどの「行動展示」を立案<sup>いちやく</sup>して、一躍有名になった方です。

この展示方法は、もともと獣医として旭山動物園に勤務していた坂東園長の、「お客さんに、野生に近い動物の行動を見てもらいたい。」という思いからできたものです。そのため、坂東園長は野生の動物の習慣や解剖学的な体のつくりなどを研究して、様々な展示方法を工夫しました。



実は、もう一つ、動物に対する園長の思いがあります。それは、「命が大切=生きていることが大切」なのではなく、「生き方が大切」ということです。

ある日、ヒグマの子どもが動物園にやってきました。子犬を飼うように、いつかは人を頼ると思っていたら、そうではありませんでした。人間をにらみつけて、一切寄せつけようとしません。餌をあげても人がいると手をつけません。きっと、餓死するまで手をつけないでしょう。

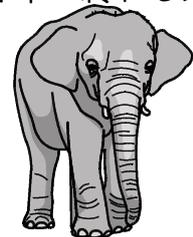
その様子を見て、坂東園長は、「近くに親もいないチビが、すでに自分の生き方というものを持っている。」と感じました。与えられた環境の中で淡々と、そして頑なに生きることが、動物の本質なのです。



食物連鎖という言葉があります。食物連鎖は命の循環<sup>じゆんかん</sup>です。死が必ず生に受け継がれ、何一つ無駄になるものはありません。たくさんの死があるから、たくさんの命が輝くのです。全てが循環しているから、何かを加えなくても春になると木々が緑に被われ、虫たちや小鳥<sup>うば</sup>たちが命を育みます。命を奪う側、奪われる側の生きものが同じ空間で「認め合い、尊厳を持って」生きています。

しかし、動物園の動物たちは、食物連鎖の環から切り離された野生の動物です。つまり、捕食者に襲われることもなく、病気になれば獣医の治療を受け、いわば、命の終わるタイミングを失った動物たちです。

このことに思い当たった坂東園長は、それぞれの動物が、本来持っている能力、個性を発揮できる生活環境をつくらう、と考えました。その結果が、「行動展示」だったのです。



人間にも個性があり、人それぞれです。坂東園長は、「自分の感性や感覚を信じてください。自分が感じたことを素直に受け止めて、何事にも挑戦してください。譲れないものは、譲れない。無理にいい子になる必要はありません。そして、何よりも大切なのはお互いの個性を認め合うことです。私は、このことを動物たちから学びました。」と言います。

自分の個性を大切に、生きること。そして、他人の個性を尊重して、認め合うこと。生きることの意味。そんなことを考えさせられた講演でした。